

農業地域に生活する高齢者の住宅熱環境について

郡山女子大学

○佐藤 篤史

日本大理工 吉田 燦

【目的】東北地方においては、高齢者が寝たきりとなる原因として依然として脳血管障害が多く、その原因の一つとして室内の熱環境が関係してくる。室内熱環境を形成する要因には冷暖房設備や住宅構造の他に居住者の生活習慣も関係していると考えられる。郡山市内で農業地域と住宅地域において高齢者の生活する住宅の熱環境調査および生活環境の調査をおこない、それぞれの特徴について検討を行った。

【方法】1992年1月から3月にかけて高齢者の生活する木造住宅9件について調査をおこなった。内訳は農業地域の続き間住宅3件、同地域の中廊下型住宅3件および住宅地域の中廊下型住宅3件である。調査項目は住宅内外温湿度測定（24時間、2分間隔）、使用暖房器具、生活環境の聞取り、及び1日の生活行動の記録である。

【結果】暖房器具の使用状況は、9件とも居間のみの一室暖房であり、こたつと石油ストーブを使用していた。各住宅ごとに特徴をみると、続き間住宅は居間の温度が15℃以下と低くなっており、非暖房室は外気温との相関が高くなっていた。農業地域の中廊下型住宅は以前の続き間を建替えて生活しており、若い世代と同居の場合、居間の暖房器具は家族の集る時間帯にのみ使用されており、高齢者のみの時間帯は低くなっていた。住宅地域においては暖房時間も比較的長く、室温も20℃前後となっていた。農家においては、続き間住宅居間場合の気積が大きいことや、すきま風が多く暖房効率が良くないこともあるが、建替えた場合でも、室温はあまりあがらない。職住が分離していないため、外と居間との出入りが多いことと、節約意識が原因であると考えられる。